

PDA 即興型英語ディベート キーノートディベート（第33回）

一般社団法人パーソナリティーディベート人財育成協会（PDA）

開催日時：2025年11月30日（日）10:00-11:30

会場：オンライン（Zoom）

参加者：5名（ディベータ4名、ジャッジ1名）

ディベートの様子

今月のキーノートディベートの論題は、“**Japan should welcome more foreigners.**（日本はもっと外国人を受け入れるべきである。）”でした。肯定側は、「日本人がより国際的な市民になるために外国人と交流する機会を増やすべきであり、そのためにはより外国人を受け入れる必要がある。日本全体にメリットがある。」と主張し、否定側は、「現状でも多くの外国人が日本に訪れ、住んでいる。それで十分であり、さらに受け入れることで雇用やコストの問題が生じてしまう。」と現状維持の必要性を主張しました。どちらのチームも自身の体験談をもとにしたエピソードを紹介しながら、ロジックを超えた説得に試みる場面も見られました。ディベートが終わると画面越しに握手を交わし、ジャッジのコメントを待つ間、論題の背景やディベートの意義などについてディスカッションが交わされました。

「AIが発達する今、ディベートをする意味・意義とは？」

ジェームズ先生「ディベートは人間の営みです。私たちは、人の言葉そのものだけでなく、それをどう伝えるか—声の調子、動き、情熱に反応します。心理学は、先に感情が動き、後から論理がその感情を補強することを示しています。ですから、人を動かしたいなら、感情に語りかけなければなりません。自分自身や身近な誰かの物語は非常に強力です。相手を説得するだけでなく、決して忘れられない主張してくれます。発言時間が短くても、可能であれば自分の過去を織り込みなさい。しかし、この感情の力は、誤って使われれば危険です。歴史上の扇動家たちもそうでした。最近の参議院選挙でも、理性よりも大衆感情を煽った政党がありました。だからこそ、注意して使わなければなりません。今日の冒頭で、『AIが存在するのに、なぜディベートをするのか』という質問がありました。答えは単純です。私たちは人間だからです。」



ディベート後の握手



論題に関するディスカッション

ディベートのフィードバックのあとは、キーノートレクチャーの時間です。キーノートスピーカーは一般社団法人立葵の代表理事（創設者）であるジェームズ・ヌツォ博士でした。日本社会が直面する人口減少と少子高齢化の課題、およびそれに対応するための政策や戦略についてご講演いただきました。特に、日本の合計特殊出生率が 1.76 にとどまり、人口維持に必要とされる 2.14 を下回っている点を指摘し、今後ますます人口減少と労働力不足が深刻化する状況が示されました。外国人受け入れに関しては、文化的統合の課題に言及され、地域社会に溶け込むための日本語教育や地域分散政策の推進が不可欠であると述べられました。参加者との質疑応答では、「外国人を受け入れることで日本文化は維持できるのか」「どのような形の統合が望ましいのか」といった質問が出され、文化の継承と国際化の両立について活発な議論が行われました。全体として、日本が今後も国際社会で影響力を維持していくためには、人口構造の変化を直視しつつ、海外人材との共生とイノベーション創出を同時に進めていくことの必要性が共有されました。



キーノートスピーカーの紹介



キーノートレクチャーの様子

参加者の声（アンケートより抜粋）

- ・自分の英語力を向上させることができ一番の課題だと感じました。また、次回よろしくお願ひいたします。
- ・レクチャーがとても興味深くよかったです。
- ・Jim 先生、フレンドリーな方で質問もしやすかったです。スタッフのみなさん、毎回、キーノートディベートの運営どうもありがとうございます。また、次を楽しみにしています。
- ・Jim 先生のレクチャーだけでなく、ディベートの価値に関するお考えを拝聴し、自分ももっと頑張ろうという気持ちになりました。即興型の英語ディベートでは、ディベートをしたらその話題はその場限りとなる印象がありますが、人の記憶に残るような説明、といった部分もとても重要だと思いました。ありがとうございました。
- ・Jim sensei, your talk gave me a valuable opportunity to think about, from Japanese perspective, what kind of people are able to integrate into society and what kind of people find it difficult. It also made me hope for a future where Japanese people can take pride in our own culture. Thank you so much.